

見るからに痛みが目立つアーケードに覆われて細長く延びる円頓寺（えんどうじ）商店街の半数近くの店が、シャッターをおろしている。

かろうじて商売を続ける古びた店舗が並ぶ商店街の中ほどに、アーケードの天井から吊り下げられた大時計がある。ほこりを被った子ども向けキャラクターの張りぼてや、色あせた造花に隠れるようにして、時を告げる。

一時間ごとに調子の狂ったオルゴールのような音楽が流れると、文字盤の扉が開き、おとぎの国の主人公たちが躍り出る。人形たちがくるくると舞う姿を、珍しそうに見上げる人はいない。

だれからも見向きされなくなったからくり時計のすぐ横に、くすんで沈んだ印象の円頓寺商店街の中では、ひときわ目立つ新築四階建てのビルがある。

一階には健康食品を扱う店が入っており、店舗脇のビルの入り口に、自然木を利用した「ホーム円頓寺」の看板が掛かっている。

新築ビルの二階から四階までが、認知症の老人たちが暮らすグループホームである。全部で九部屋あるが、まだオープンしたばかりの施設で、満室にはほど遠く、ようやく三名が入居したところだ。

二階のリビングに面した二部屋に、身体介護が必要なふたりの入居者がそれぞれ入り、居室が四つある三階の住人は、比較的元気な富子ひとりだけである。大柄な富子は杖を使ってゆっくりと足を引きずるようにして歩く。

富子は姉とふたりで暮らしていたが、高齢の姉が病気がちな富子の面倒をみられなくなり、一か月まえにホーム円頓寺にやってきた。

姉が経営する中華料理店の手伝いを、ずっとしていたという富子は、ホームでも一日中エプロンをしている。でっぴりとした腹にエプロンの紐が廻りきらなくて着物の腰紐を上から結わえ、エプロンを押さえている。ときどきエプロンをつけ忘れ、腰紐だけが太い胴回りにきりりと結ばれていることもあるのだが、その姿は富子が元気に店で働いていたころを彷彿とさせる。

九月になってもまだ続く暑さにげんなりするころ、ホーム円頓寺に、四人目の入居者としてカヨリが入ってきた。

入居した日、カヨリはブラウスの上に新品の花柄のパジャマを羽織り、すましてリビングの椅子に腰かけた。

「あら、カヨリさん、すてきなパジャマですね。息子さんが買ってくれたの？」

介護職員の広岡が声をかけると、カヨリは「これ？」というように、自分の着ているパジャマを指差しながら首を傾け笑顔をみせた。ゆるんだ口元から歯のない歯茎が少しのぞく。

「夜、寝るとき着替えるから、それまでは脱いでいきましょうね」

広岡の提案を拒否するように、カヨリは羽織っていたパジャマの前ボタンを、不自由な左手も使い、時間をかけてゆっくり留めた。

眉間に皺を寄せながらボタンを全部掛け終わると、口を大きく開けて声を出さずに愉快そうに笑った。下の糸切り歯のあたりに一本だけ歯が残っているのが見える。険しい顔つきが、一変して愛嬌のある表情になった。

手入れの行き届いたウエーブのかかった白髪が、カヨリの上品な顔立ちを引き立てている。小柄な身体がリビングの椅子にすっぽりと収まり、手足をそろえて行儀よく座るたたずまいは、旧家の奥様として暮らしていたというカヨリのかつての姿を思い浮かばせる。

ホームの入居には、カヨリによく似た中年の息子が付き添ってきた。彼は三階のカヨリの部屋で引越し荷物を整えてから、老人たちが集まる二階のリビングに下りてきた。

「部屋、片付けたからね。帰るよ」

息子に話しかけられ、カヨリは初めてしわがれた声を発した。

「帰る？」

驚いたように息子に問いかける。

彼はほかの老人たちに目をやりながら、

「こんなもの着て。誰もパジャマなんか着ていないでしょ。恥ずかしいから着替えなさい」

カヲリの着ているパジャマを少しひっぱった。

「いいの。これでいいの」

カヲリは子どもが駄々をこねるように、身体をねじって逆らった。

彼は、もう一度母親に着替えを促したが、いよいよ不機嫌になるカヲリをこれ以上説得するのはあきらめ、広岡に軽く会釈すると、一階の玄関に通じる階段を下りていった。

まだ機嫌の直らないカヲリは口を尖らせたまま、自分とそっくりな華奢な身体つきの息子が、エレベーターを待たずに、背を丸めて階段を力なく下りる後ろ姿を見送った。

新入りのカヲリの対応に追われていた広岡が、リビングの椅子で気持ちよさそうに居眠りをする老人たちを起こして、三時のおやつが始まった。カヲリの息子が、「皆さんでどうぞ」と置いていった老舗の有名な饅頭だ。カヲリの好物らしい。

カヲリはさきほどの不機嫌をすっかり忘れてその饅頭をあつというまに平らげ、二個目に手を出した瞬間、隣の席の富子が怒鳴った。

「泥棒猫みたいなことするな！」

カヲリは動きを止めたまま、きょとんとした顔つきで、助けを求めるように、台所で夕食の支度にとりかかっている広岡に視線を向けた。

「夕食が食べられなくなるといけないから、一個にしておきましょうね」

台所のカウンター越しに、パン粉をつけた豚肉を持ち上げて見せながら、広岡はその場をとりなした。

「今晚はとんかつですよ。カヲリさん、とんかつ好きですか？」

カヲリは、表情を変えずに無言で小さくうなづく。

「カヲリさんはとんかつに何をかけるの？ ソース？ それとも味噌カツにしましょうか」

「わたしは醤油」

ハスキーな声でカヲリが、おずおずと答える。

介護職の経験を積んだベテランの広岡が事をうまく納めたが、富子はまだ腹の虫がおさまらない。

「来たばかりだからって、ちやほやすることはない」

そっぽを向いたまま、もうひとつ、捨て台詞を吐いた。

「バツカじゃなからうか、昼間から寝巻き着て……」

富子はホームに来てすぐのころ、話し相手をする広岡にしみじみと語った。

「一緒にいるときは姉さんとけんかばかりしていたけれど、離れてみればさみしいわ」

富子は姉の代わりになるけんか相手を、ホームでさがしているらしいが、おとなしいカヲリには、威勢のいい富子のけんか相手は務まりそうもなかった。

カヲリは入居から二、三週間して、ホームの生活に慣れてくると、部屋の中の無駄な電気を消すため、不自由な左手を抱えるようにして歩きまわった。

広岡が、台所で作業中にトイレの介助に呼び出され、調理台を離れると、カヲリはすかさず台所の電気を消しに行く。

大急ぎで用事を済まし、料理の続きをしようとした広岡が、若い娘のような甲高い声をあげる。

「あらー、カヲリさん。電気、消してくれたの？ ありがとう」

満足そうにうなづくカヲリの隣で、富子が言う。

「すぐ戻ってくるんだから、いちいち消さなくていいの！」

富子の不満は続く。

「夜、便所に行こうと思って部屋を出たら、廊下が真っ暗。あいつが電気を全部消してしまうんだ。危なくてしょうがないよ。まったく」

富子の苦情は耳に入らないようすで、カヲリはもうトイレの電気が点いているのを見つけて消しに行く。

人の気配を感知して自動で点灯するトイレの電気は、カヲリがトイレのそばから離れない限り消えない。カヲリは不思議そうにトイレの扉を開けたまま、いつまでたっても消えない電気のスイッチをパチンパチンと繰り返した。

「ばかたれが……」

富子が、吐き出すように呟く。

カヲリはカーテンを閉めるのも日課にしており、三時のおやつを終えると、まだ陽の明るいうちから、リビングのカーテンを全部閉めてしまう。

でっぴりとしてすばやく動けない富子は、椅子に座ったまま大声を出す。

「カーテンは、まだ、早い！」

カヲリは富子の剣幕に首をすくめてみせてから、残念そうに、いま閉めたばかりのカーテンを開ける。

カヲリが自分の部屋にエレベーターで戻るとき、広岡は指を三本立てて「三階ですよ」と念を押す。カヲリも同じように指を三本立てて何度もうなずきながら、ひとりでエレベーターに乗るのだが、一旦上に行ったエレベーターが、しばらくすると二階のエレベーター扉のガラス越しに、一階へすーっと下りていくのが見えた。エレベーターの中には、どういう状況に置かれているのか判断がつかず表情を失ったカヲリの姿があった。

数日まえにカヲリがひとりで外へ出てしまったときは、向かいの薬局の奥さんが気づき、事なきを得た。またひとりで出て行っては大変と、広岡があわてて階段を駆け下りるうちにエレベーターはカヲリを乗せたまま上へ引き返す。二階のエレベーターの窓を、また、びっくりしてぼんやり目を見開いたカヲリが通りすぎた。行き先ボタンを手当たり次第、押しているらしい。

「なに、遊んでんだか……」

富子は、困ったもんだと言いたげに、はっと息を吐いて笑った。

カヲリの息子は円頓寺商店街から歩いて十分足らずの名古屋駅前のオフィスビルで仕事をしており、勤務のあと、たびたび面会に訪れた。

「誰だかわかる？」

彼はカヲリと顔を合わすと、まずこう言って、おそろおそろ母親に訊ねる。

「わかるよ」

不本意な質問への抗議の気持ちを込めてでもいるのか、カヲリはぶっきらぼうに低い声で答えた。母親の返事にひとまず安心した彼は、持ってきた入れ歯をカヲリに見せる。

カヲリは家にいたとき、ずっと入れ歯を使っていたが、ホームに入る直前に入れ歯の具合が悪くなり、自宅近くの歯科医院に修理を依頼していたのだ。

「もう、入れ歯は要らない」

カヲリは首を横に振りながら、宣言するように言った。

母親の喜ぶ顔を期待していた彼は、いぶかしげな顔で聞く。

「どうして要らないの？」

「わたしはこれで食べるの」

カヲリは口を大きく開けて、指で歯茎を示した。

「入れ歯があれば、もっと何でも食べられるよ」

「これで食べられるものを食べる。それでいいの。それで充分なの」

母親の固い意向を知った彼は、あとでカヲリの気が変わったときのために、入れ歯を広岡に託した。

帰る息子の階段を下る足音が小さくなったところで、母子のやり取りを傍らで聞いていた富子が、カヲリに身体を傾け内緒話をするようにささやいた。

「ほんと、やっかいなんだよ、入れ歯は。いっそ、ないほうがいい」

週末にもカヲリの息子はやってきた。

「誰だかわかる？」

「わかるよ」

カヲリの変わらない返事にほっとして、今日は行きつけの美容室に誘う。

「髪の毛が伸びたから、切りに行こう」

「いいの。髪なんてどうでもいいの」

カヲリは頑として動かない。

「機会を見て、こちらでお連れしましょうか」

広岡の申し出に、

「じゃ、お願いします」

納得しがたい母親のことばを心に噛み締めるように、彼は階段をゆっくりと下りた。

数日後、若い女性職員が、最近商店街に開店した、「安くて早い」が売り文句の床屋にカヲリを連れて行った。

「あのね、あの人みたいににして」

カヲリは自分に付き添ってきた職員を指さし、理容師に希望を伝えた。

「こんなに短くしたら、息子さんびっくりしちゃうよ」

ベリー・ショートの髪型のその職員は、カヲリの注文を押しとどめたが、

「いいの。いいの。それがいいの」

カヲリは取り合わず、男性の刈り上げに近いヘヤースタイルができあがった。

豊かな白髪が大きく波打っていたときとは別の、カヲリの意志的な顔立ちが浮かびあがった。鏡に映る自分の姿を満足げに眺めたあと、カヲリはにこりと笑った。晴れ晴れとした笑顔だった。

「さっぱりしたね」

富子が珍しく機嫌よくカヲリに声をかけた。

そんなある日、分家の者と名乗る身なりを整えた初老の夫婦がカヲリを訪ねてきた。

「本家の姉さんが、こんなところに……」

髪型のすっかり変わったカヲリに驚いたのか、歯の抜けた人相に胸を突かれたのか、女性はハンカチで目頭を押さえた。さびれた商店街の一角で暮らすカヲリの境遇を悲しんでいるようすだ。

カヲリは困惑の表情で手土産の饅頭をほお張り、いつまでも涙の止まらないその人に、帰り際、慰めるようにやさしく微笑みかけて、訪問のお礼と別れのことばを丁寧に述べた。

秋になっても、なお暑さは残った。

入居者の皆が連れ立っていく散歩は、陽射しを避けて商店街のアーケードの下を歩いた。アーケードは、雨の日の車椅子の外出も可能にしてくれる。

カヲリは近所の花屋で好きな花を選んで、リビングに活けた。十時のおやつには皆で喫茶店のモーニング・サービスに行ったりもした。コーヒーを注文すればフレンチ・トーストやお菓子がついてくる。甘いものに目がないカヲリは、富子におまけのお菓子を分けてもらうようになっていた。

アーケード街の中なら安心して出歩くカヲリだが、それ以外はホームから少しでも離れることを嫌がり、遠出のときは必ず、ひとりで留守番をすると言い張った。

商店街に隣接して昔の町並みを残す一区画があり、民家の屋根にはところどころ小さな祠が祀ら

れている。これらの屋根神様を見て歩けば、ちょうどよい散策になるのだが、カヲリは頑なに拒んだ。

名古屋駅前に超高層ビルが竣工したばかりで、テレビなどで話題をさらっていた。皆でテレビを見るうち、ビルの最上階に上って展望室から景色を眺めようと盛りあがった。

職員と入居者全員で出かけ、スカイレストランで休憩するという企画にもカヲリは結局乗ってこず、広岡とふたりホームに残った。

広岡が「洗濯ものを取り込みに行こう」とカヲリを誘う。屋上の物干し場に出ると、二階のリビングからは見えない大きな空が広がっていた。空の真ん中には、円頓寺商店街を見下ろすようにそびえ立つ摩天楼があった。

カヲリが仰ぎ見て言う。

「高いねえ」

広岡が洗濯物を取り込む手を休めて答える。

「高いですね。まぶしいくらい新しいわね」

すぐ下を覗いたカヲリの視線は、細長く伸びるアーケードのくすんだ屋根をたどった。

「ここにも、そういう時があったんだわ」

「商店街のこと？」

「そう。まぶしいくらい華やいだ時があったのよ。ここにも」

ひとりごとのようにカヲリが続ける。

「順番、順番」

「じゃあ、私がカヲリさんくらいの年になったら、あの高いビルにホームができて、一番上の見晴らしのいい部屋で、空や雲を見て暮らすことになるかもしれないわね」

広岡の言葉に、カヲリは楽しげに何度もうなずいた。

厳しい残暑が続いたあと、ようやくさわやかな風を感じられる季節になった。

空がきれいに晴れ上がった初秋のある日、アーケード街から少し離れた公園まで散歩することになった。カヲリはこのとき初めて皆と一緒に公園まで行くと言った。

カヲリは広岡の腕をつかんで放さず、富子の車椅子を押す広岡のそばにぴったりと寄り添って、目的の公園まで不安げに歩いた。

赤・青・黄の原色でカラフルに塗り立てられたブランコや滑り台のある公園の外周を、早い紅葉が始まった桜の古木が縁取っており、野宿者がその幹と枝を利用して、ブルーシートの小屋を作って生活している。

小屋の周りにはアルミ缶を詰めたビニール袋が積み上げてあり、出入り口付近の棚にはやかんや鍋がきちんと並べられ、身だしなみを整えるためか、ふち飾りのある鏡が、ちょうど良い高さの桜の木の枝に掛かっている。そしてキャスター付の事務用椅子が、秋の陽を浴びて、主を待つようにぽつんと一脚、置いてある。

住人は外出中なのか、人の気配はない。

公園の真ん中で砂ぼこりを上げながら三角ベースに興じる子どもたちを皆で見ていると、カヲリはそれまで固く握っていた広岡の二の腕を放し、とことこと歩き出した。

「どこ行くの。カヲリさん」

広岡の声を背に受けながら、カヲリはわき目もふらず、子どもたちが遊ぶ三角ベースのグラウンドを横切り、ホームレスのすみかに向かって進んだ。不自由な左手を抱えるようにして、華奢なカヲリには大きすぎるのか、おむつの尻をもこもこさせながら一直線に進んだ。

テントの前に置かれたキャスター付の椅子のところにとどり着き、背もたれに手をかけると、カヲリは顔をほころばせて広岡に視線を送り、それから躊躇なく椅子に腰を下ろして勢いよく地面を

蹴った。

小柄なカヲリを乗せた椅子がくるくる廻る。

椅子の肘かけを握っていた手を放し、両手を挙げて万歳をしながら、カヲリは廻った。

歯のない歯茎の顔が笑っている。

空高く晴れ渡った陽射しの中を、紅く色づいた桜の葉がひらりひらりと舞い落ち、その下ではしゃく短い髪のカヲリは、軽やかだった。

風に乗って遠くからかすかに聞こえてくる商店街のたれからも見向きされなくなったからくり時計の奏でる、音程がはずれ、間延びしたダンス曲をバックグラウンド・ミュージックに、カヲリは楽しげに廻り続ける。

(了)